ふかしんメッセージ㊳
― 校長から香住のみなさんへ ―

令和６年２月１２日（月）

「世界のオザワ」

「**世界であれほど信頼されて人気があって、いい仕事をした日本人指揮者は今のところ小沢さんだけだと思う。オーケストラは人間だから、まとめて引っ張って行くのは並大抵のことではない。世界の名だたるオーケストラをあれだけ完全に制御して、最後まで信頼を失わなかった点でずば抜けていた。カリスマ性があり、何か反発していても、彼の前ではその魅力に取りつかれてしまう。**」と音楽評論家の 東条碩夫（とうじょうひろお） 氏が指揮者の小澤征爾（おざわせいじ）さんのことを語っています。

その小澤征爾さんが２月６日、８８歳で亡くなりました。

小澤征爾さんは、旧満州（現中国東北部）で生まれ、敗戦で日本に引き揚げ、１０代から斎藤英雄（さいとうひでお）氏に学びました。１９５９（昭和３４）年には音楽を勉強するために貨物船に乗り込み、単身フランスに渡りました。上陸地のマルセイユからスクーターに日の丸をつけてパリを目指し、パリのブザンソン指揮者コンクールで優勝。２０世紀を代表する指揮者であるシャルル=ミュンシュやヘルベルト=フォン=カラヤン、レナード=バーンスタインに師事し、楽譜の深い読み込みに支えられた綿密な解釈と全身を使った力強い指揮によって評価を確立しました。

１９６１～６２（昭和３６～３７）年にレナード=バーンスタインの下で、ニューヨーク・フィルの副指揮者を務めて以降、サンフランシスコ交響楽団の音楽監督などを歴任、１９７３（昭和４８）年にはアメリカの五大オーケストラの一つであるボストン交響楽団の音楽監督に就任し、２００２（平成１４）年までの２９年間の長きにわたって在任しました。こうした世界での小沢さんの活躍は敗戦で自信をなくしていた多くの日本人に勇気と希望を与えたと言われています。ボストン交響楽団最後の年、２００２（平成１４）年には東洋人として初めてウィーン国立歌劇場の音楽監督に就任し、オペラ上演を手掛けるとともに１月１日にはウィーンで行われたニューイヤーコンサートでウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の指揮もされています。ウィーン歌劇場があるオーストリア政府は、小沢征爾さんの逝去にあたり「**現代最高の音楽家としての比類なき経歴は生前から伝説的だった。国や文化を超える世界共通言語としての音楽の本質を体現していた。彼は音楽そのものだった。**」と最大級の

賛辞と共に声明を発表しています。２００８（平成２０）年には文化勲章を受章され、２０２２（令和４）年には日本芸術院会員に選ばれています。

この眩(まばゆ)いほどの比類なき業績がある小沢さんですが、若い時には、当時のオーケストラにとっては破天荒に感じられたその言動から、ＮＨＫ交響楽団の楽団員全員からボイコットされるという苦い経験もしています。そんな小沢さんが「世界のオザワ」と称され、世界中から尊敬される存在になったのは、その類まれな卓越した音楽性や指揮者としての凄い力量だけではなかったのではないかと思うのです。小沢さんと成城学園同窓の後輩である指揮者の 井上道義(いのうえみちよし)氏 は「**一人の日本人が世界で活躍するにはあそこまで努力が必要なのか！**」と身震いさせられたと語っています。**その努力の中心は「暗譜」であり、毎朝暗い時間に起きて総譜を読み込んだ勉強量が説得力を支えていた**と言われます。

トロント、サンフランシスコ、ボストンとアメリカの交響楽団の音楽監督を歴任しながら、世界各地の有名オーケストラに客演し、何処でも一人ひとりが一流の芸術家でもあるオーケストラのメンバーの誰からも愛され続けたのは、こうした**他人(ひと)の目に見えないところでの凄まじい努力があったから**に他ならないのではないでしょうか。しかし、それだけでは一流オーケストラの誇り高いメンバーから愛されることはなかったはずです。そこには、類まれな卓越した音楽性や指揮者としての力量と共に、小沢さんと４０年来の交流がある建築家の 安藤忠雄(あんどうただお)氏 が「**自由奔放で誰に対しても分け隔てなく接する、あれほど魅力的な人は二度と現れないでしょう。**」というほどの**豊かな「人間力」があったから**なのだと思います。小沢さんと接したことのある多くの人たちが、世界の超一流のマエストロという世界的存在でありながら、子どもから大人まで誰にでも気さくに接してくれたことを語っていることがそれを物語っています。

日本人が海外に行くことが決して当たり前ではなかった時代、若干２３歳で単身フランスに渡り、その後も世界を股にかけて活躍した経験から、小沢さんは**「僕の人生は実験だった。」「もっと世界とあちこち混ざらないと。絶対狭くなっちゃダメ。」**と語っています。こうして「西洋音楽の世界で日本人がどこまで行けるか！？」と、戦後、欧米に追いつくことが悲願だった時代に、**前例が全くなかった世界にたった一人で果敢にチャレンジし、自らの力で道を切り拓き、それを音楽で成し遂げた**のが小沢さんだったのです。

また、小沢さんは、晩年まで子供から大人まで若手の育成に力を注がれていたことはあまりにも有名です。京都、長野、スイスで各国から集まった若者たちを教え、互いの音を徹底的に聴き合うという合奏の要諦について、繰り返し粘り強く教えておられたということです。世界的マエストロでありながら、近寄りがたい孤高の存在になるのではなく、長野県松本市で音楽祭を創り上げたり、多くの人たちと音楽の喜びを広く分かち合うことに心を砕かれていたことが小沢さんの小沢さんたるゆえんと言えるのではないでしょうか。

超一流の指揮者となった後も、常に他人がまねできないような凄まじい努力を続けるという自分に厳しいストイックさと、そうでありながら周りの人々には自由闊達で分け隔てなく気さくに接する人間性、そして常に前人未到の高みに挑み続けるチャレンジ精神、さらには次代の音楽界を担う若い人たちの育成と、そのすべてが総合された「世界のオザワ」だったのだと思います。小沢征爾さんの生き方・あり方は、私たちに大きな示唆を与えてくれています。

改めて小澤征爾さんの御冥福を心からお祈りしたいと思います。 合掌

校 長　　深 瀬　信 也